

# 糖度推移からみた‘王秋’の収穫方法

## 1 情報・成果の内容

### (1) 背景・目的

‘王秋’の選果では収穫期後半における低糖度果実の増加が問題になっている。そこで、成熟期の樹上における糖度推移を調査し、原因究明を行うとともに収穫時期の判断材料とする。

### (2) 情報・成果の要約

- 1) 樹上における同一果実の糖度は12月まで徐々に上昇する。
- 2) 高糖度果実は樹冠周辺部、低糖度果実はロート部から発生した側枝元部に多い。
- 3) 収穫期後半の低糖度果実の出荷割合を低下させるためには、主枝元部付近の収穫を遅らせる区分収穫を行うのが良い。

## 2 試験成果の概要

- 1) 14年生‘王秋’1樹を供試し、50果について10月2日から約1週間ごとに合計12回(最終12月17日)、携帯型非破壊糖度計(クボタ社製 K-BA100)を用いて樹上における果実の糖度変化を調査した。同時に調査果実以外の20果を採取し、搾汁液の糖度を測定し、非破壊糖度計測定値の補正を行った。
- 2) 糖度は調査最終日まで徐々に上昇した(第1図)。11月中旬以降落葉が進むにしたがい、糖度上昇がやや緩慢になり、同月下旬の食味調査では果実硬度の低下が認められた。
- 3) 調査開始時点の糖度により高糖度グループ(12.5%以上)と低糖度グループ(12.5%未満)に分類した。両グループの調査期間中における糖度の上昇程度は、同等であり、調査開始時における約1.5%の糖度差は調査終了まで縮まらなかった(第2図)。
- 4) 着果位置ごとの糖度分布を調査すると側枝の先端部分で高糖度果実が多く、主枝元部付近では低糖度果実が多い傾向が認められた(第3図)。主枝元部付近には3)の低糖度グループの68%が含まれていた。
- 5) 以上の結果から、収穫は糖度が高い樹冠周辺部から始め、主枝元部付近に着果した果実は収穫を遅らせる区分収穫を行うことにより収穫後半の低糖度果実の増加を減少できると考えられた。ただし、低糖度グループの糖度は高糖度グループほどには上がらないため果実硬度の低下を考慮すると、11月中旬までに収穫を終える必要があると考えられた。

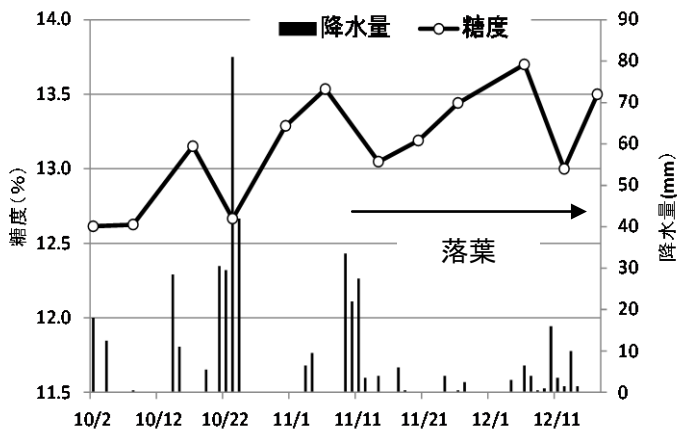


図1 糖度推移と降水量

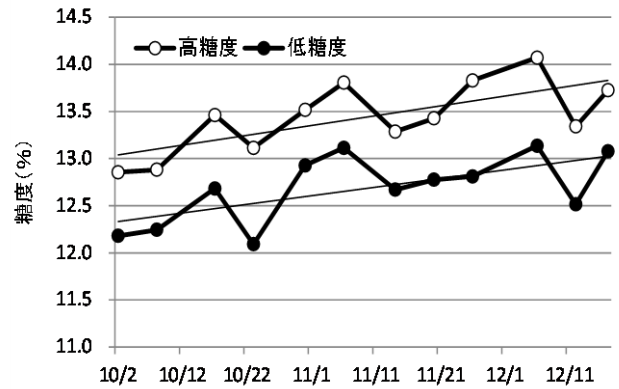


図2 高糖度グループと低糖度グループの糖度推移

10月2日時点で糖度12.5%以上を高糖度グループ、12.5%未満を低糖度グループとした果実の平均糖度

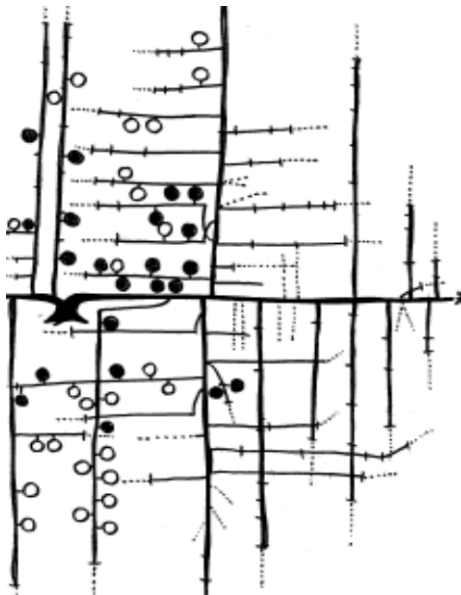


図3 糖度分布

○：13.0%以上、●：12.9%以下

糖度は調査最終日(12/17)の値

### 3 利用上の留意点

- (1) まとまった降雨があった場合は糖度が一時的に低下する傾向がある。低下幅については、さらに精査する必要がある。
- (2) 枝が多く立つ主枝元部付近は、除芽、摘心、夏季誘引により糖度向上につながる管理を行う。

### 4 試験担当者

果樹研究室 主任研究員 井戸亮史  
室長 池田隆政